台大日本語文研究第 5 期
2003 年 12 月，頁 163～190

含有外來語成分的混種詞之和語・漢語成分
－翻譯混種詞與和製混種詞之比較研究－

林 慧君*

摘　要

日語詞彙主要可分爲三類：「和語」（日語固有詞彙）、「漢語」（源於中國的詞彙）、「外來語」（近現代音譯外語的詞彙）。本文主要探討：在翻譯詞階段以及造詞階段上，與外來語成分複合成混種詞的和語・漢語成分，其構詞之異同。

本文首先論述含有外來語成分的混種詞分成翻譯混種詞及和製混種詞的必要性。爾後，有關在翻譯混種詞及和製混種詞上均表現出很強的造詞能力的漢語成分，透過實例考察，探討其在翻譯詞階段及造詞階段上的構詞方面的異同。而有關和語成分的造詞特性，經本論文的考察，了解到其在翻譯混種詞的造詞能力相當薄弱，但在和製混種詞上則發揮某種程度的造詞功能。

另外，從與外來語成分的結合形態來看，漢語成分其複合詞根之結合力要比單一詞根強得多；和語成分則是單一詞根之結合力比複合詞根強。從這點來看，若說一單位的外來語成分的構詞機能相當於二單位的漢語成分的構詞機能，則可推斷一單位外來語成分的構詞機能與一單位的和語成分相當。

最後，混種詞其表示類名的後項成分，在翻譯詞以及造詞的階段上亦有差異：翻譯混種詞的後項類名要素，幾乎是漢語成分；和製混種詞則是除了漢語成分之外，也有不少和語以及外來語的單一詞根。

關鍵詞：構詞、外來語、翻譯混種詞、和製混種詞

臺灣大學學術期刊資料庫

* 臺灣大學日本語文學系助理教授

The Word Formation of Gailaigo Hybrids: Comparative Analysis of Wago and Kango Constituents

Lin, Hui-jun*

Abstract

Japanese lexicon is comprised of three major categories: Wago (native Japanese 和語), Kango (Sino-Japanese 漢語), and Gailaigo (loanwords 外來語). This paper examines how Wago and Kango constituents play different roles in loan translation and coinage as far as the formation of Gailaigo hybrid is concerned. My research shows that first, while Kango constituents demonstrate strong capacity for compounding with Gailaigo in both loan translation and coinage, Wago constituents function mainly in the latter. Second, when compounded with one unit of Gailaigo, Kango and Wago also show different patterns. A complex base of Kango constituents generally exhibits higher compounding capacity or tendency than when it is a single base, while the Wago constituents do the opposite. This suggests that if one unit of Gailaigo constituent equals two units of Kango constituents (as many others have asserted), then we may also assume that one unit of Gailaigo constituent is equivalent to one unit of Wago constituent. Last but not the least, for the Gailaigo hybrid representing nominal classification, if it is compounded by the rule of loan translation, the last element of the hybrid tends to be a Kango constituent, but no such tendency is found if it is a case of coinage.

Key words: word formation, Gailaigo, hybrid, loan translation, coinage,

臺灣大學學術期刊資料庫

* Assistant Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University.

外来語成分を含む混種語の和語·漢語成分について
—翻訳混種語と和製混種語との比較から—

林 慧君*

要　旨

本稿の目的は外来語成分を含む混種語における和語·漢語成分の翻訳レベルと造語レベルでの語構成的異同を解明することにある。

本稿ではまず、外来語成分を含む混種語を翻訳混種語と和製混種語に分ける必要を論じた。その後、翻訳・和製混種語の両者でともに活発な造語力を示している漢語成分の、翻訳レベルと造語レベルでの造語の異同を示した。一方、和語成分のほうは、翻訳混種語では造語力が殆ど弱いが、和製混種語ではある程度の造語機能を果たしていることを見た。

また、外来語語基との結合形態の面では、漢語成分は複合語基の方が多いのに対して、和語成分は逆に単純語基の方が多いことを確認できた。この事実からは、一単位の外来語語基の機能が二単位の漢語語基のそれに相当するとの指摘を考え合わせると、一単位の外来語語基が一単位の和語語基に相当する、と考えることができよう。

最後に混種語の後項要素として類概念を表す成分も、翻訳レベルと和製レベルにおいて相違を見せた。その成分は、翻訳混種語では殆どが漢語の単純・複合語基であるが、和製混種語ではそれら以外に、和語単純語基と外来語単純語基も少なからずということがわかった。

キーワード: 語構成　外来語　混種語　翻訳レベル　造語レベル

* 台湾大学日本語文学系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

外来語成分を含む混種語の和語·漢語成分について
—翻訳混種語と和製混種語との比較から—

林 慧君

一、はじめに

外来語複合語の研究は、以下のような考えから、外来語の借用レベル、翻訳レベル、そして造語レベル、という三つのレベルに分けて考える必要があるように思われる。例えば、

a「ワイドスクリーン」(wide screen)、「ツインルーム（twin room)」、「バーコード」（bar code）…

b「ホラー映画」（horror movie)、「巡航ミサイル」（cruise missile)、「テレビ会議」（teleconference)、「バブル現象」（bubble phenomenon)、「スワップ取引」（swap transaction）…

c「使い捨てカメラ」、「厚底ブーツ」、「セーラー服」、「デジタル広告」、「ダンベル体操」

d「アルミホイル」、「インスタントラーメン」、「オートキャンプ」、「テーマミュージック」…

のような例で考えてみよう。a は外国語原語を日本語の音韻構造によって音を変えて借用しているものである。このようなものは、日本語の造語現象とはまったく関係がないもので、借用レベルでの外来語複合語と言える。ｂは、外国語原語における複合語の一部を漢語成分や和語成分に訳したもので、その結果、外来語成分が和語又は漢語成分と結合した形の混種語の外来語である。これは借用レベルを超えた翻訳レベルでの外来語複合語である。ｃとｄは、外国語原語とはまったく関係せずに、日本語の語基としての外来語成分が和語・漢語成分と複合、または外来語成分同士で複合したものであ

臺灣大學圖書館 期刊資料庫

る。ｃは混種語の外来語複合語であり、ｄは外来語同士の複合語であるが、両者はいずれも日本語造語レベルの外来語複合語である点で共通していると言える。

筆者は、外来語複合語における語構成の問題を取り上げる際には、まず外来語複合語が上記の三つの内どのレベルのものなのかを先に明らかにした上で分析を行うべきだと考える。それぞれのレベルにおける語構成の問題は根本的に本質が違うためである[1]。上記のａのような借用語の語構成問題は、日本語の中に外来語として借用する前の原語段階、つまり、その外国語における語構成の問題なのであって、日本語における外来語複合語の語構成研究の範囲には入らないと筆者は考える。しかし、ｃとｄは造語レベルの問題であり、当然外来語複合語における語構成分析の対象になる。一方、翻訳レベルのものであるｂは、非外来語成分の部分がそのまま外来語成分で借用されてもよさそうなのに、和語・漢語成分に意訳された形で用いられるものである。この意訳のことは、実は語構成の問題とも関わっていると考えられるもので、この種の翻訳語の混種語も外来語の語構成問題の研究対象とすべきであろう。

本稿では、日本語における外来語複合語のうち、特に外来語成分を含む混種語、即ち、上記のｂの翻訳語の混種語とｃの和製語の混種語[2]だけを取り上げ、その特徴を考察する。上記のｄ、即ち外来語成分同士の結合による和製の外来語複合語も大変興味深いものであるが、また別の機会を待ちたい。

従来、合成語の語構成研究と言えば、同種構成要素同士でできた合成語、特に漢語複合語と和語複合語に関する研究が主流で、その

---

[1] このことについては、野村(1982)46頁にも
それら(筆者注：二単位の１βの外来語)が借用としての複合語なのか、日本語の語基としての結合による和製複合語なのかということを明らかにしないと、外来語の造語力の解明という点では、まだ不十分である。
という記述が見られる。つまり、まず外来語複合語が借用のものか、和製のものかを解き明かす必要があるということである。

[2] 小論ではｂのような翻訳語の混種語を翻訳混種語、ｃのような和製語の混種語を和製混種語と言うことにする。

臺灣大學術期刊資料庫

方面では様々な研究成果があげられていると言える。それに対して、異種間の複合による混種語に関する語構成の研究はまだまだ少ないようである。

混種語についての先行研究は、管見の限りでは、白井(1989、1991a、1991b)、原野(1992)、それから拙著(2001)などをあげることができる。そのうち、白井(1991a、1991b)は、古典語の混種語を分析の対象としたものであり、扱っている混種語は和語と漢語が結合したものである。これは本稿の研究対象、外来語成分を含む混種語とは違う語種のものである。一方、白井(1989)は、現代語の混種語について、その語構成や和語・漢語・外来語の形態素別の特徴に関して分析したものである。ところが、それには研究対象を和製外来語としている[3]ものの、その付録資料には翻訳混種語(例えば、リンパ管、ノーベル賞、アンドロメダ銀河、アイソトニック飲料など)も多数見られる。これから考えるに、その混種語が翻訳語なのか、それとも和製語なのかという本質の問題を考えなかったようである。しかし、前にも述べたように、外来語は借用、翻訳、そして造語、それぞれのレベルにおいて語構成の問題を検討すべきであり、区別せずに同じく取り扱ってしまうと、外来語の造語現象の本質を見逃してしまう恐れがあるように思える。

それから、原野(1992)は、主に日本語教育の観点からの外来語及び外来語成分を含む混種語についての分析であり、語構成を分析する本稿の立場とは違う。

筆者は林(2001)で外来語成分を含む混種語について、その造語実態の調査を通して、外来語成分が和語成分より漢語成分の方と結合

---

[3] 白井(1989)312 頁に、
外来語の造語力を明らかにする一番有効な方法は和製外来語を調べてみることであろう。
と述べられており、後の付録資料には、「リンパ管」のような翻訳語があがっている。このような例を広義の和製語とする考えも有り得るかもしれないが、翻訳語も和製語として考えて妥当かどうか、やや疑問に思う。現に語の形成のルートが違うことから考えると、本稿のように翻訳語と和製語を区別すべきであろう。

しやすいという現象が検討できた。更に、その外来語成分がなぜ漢語成分の方と相性がよいのか、という点について、「語形成の単位：レベル順序つけ」という観点から説明した。

本稿は前稿の研究を踏まえながら、外来語成分を含む混種語を対象とし、個々の混種語が翻訳語か和製語かを区別する立場に基づき、混種語を二分類する。そして、語構成のカテゴリーから、それぞれの構成要素(即ち、和語成分、漢語成分、外来語成分)について分析を行い、翻訳混種語と和製混種語における構成要素の語構成的異同を検討する。その後、和語･漢語・外来語の構成要素がこの二種類の混種語においてそれぞれどのような造語役割を果たしているのかを解明したい。

紙幅制限のため、今回はまず、外来語成分を含む混種語における和語成分と漢語成分についての分析だけを取り上げることにする。外来語成分に関しては、外来語成分を含む混種語のみならず、上述のｄ外来語同士の結合による外来語複合語とも併せて比較、検討すべきだと考える故、今回は割愛せざるを得なかった。

二、調査について

外来語を調査するに当たって、様々な分野で活発な造語力を発揮している外来語をより網羅的に集めるために、辞書、雑誌、小説、シナリオなどから、生きている外来語の用例を幅広く採集した。本稿の調査研究に用いた資料及び用例について、以下に述べよう。

まず、辞書類の資料として『ジャンル別編集　最新カタカナ用語「読む見る」事典』を用いた。この辞書から「和製語」と記した混種語及び外来語同士の外来語複合語、そして「和製語」とは記していないが、外来語成分と和語･漢語成分との混種語も翻訳語としてピックアップした。次に、調査対象の雑誌用例(外来語の混種語と複合語)は、週刊誌『AERA』の 2001 年 4 月から 2002 年 2 月まで一年間の偶数月分の巻頭記事から拾い上げた。それから、小説『冬のオペラ』『レクイエム』『とんがらしの誘惑』と計 3 冊、そして『’01 年

臺灣大學學術期刊資料庫

鑑代表シナリオ集』からも外来語成分を含む混種語、外来語同士の複合語の語例を採った。

本稿の主旨に照らし、まず混種語だけを調査対象として分析を行う。考察の便宜から、今回は次のような例を対象外にする。

① 混種語全体が固有名詞の場合は対象から除く。例えば、「成田エクスプレス」「サイパン沖」「ペリカン便」「スーパーひかり」など。但し、固有名詞成分(人名、地名など)を含むが、複合語全体が固有名詞ではないものは調査用例とする。例えば、「モンロー効果」「ブロッケン現象」「グリニッジ標準時」など。

② 本稿は、和語成分及び漢語成分が外来語成分と結合した混種語において、それらの成分がどのような造語役割を果たすのかを考察するためのものであり、即ち、単一語種成分である和語成分と漢語成分の、外来語成分を含む混種語における造語性、造語役割などを論じることを主な目的とする。そこで、混種語が更にほかの成分と結合したもの、例えば「排ガス規制」「水上バイク便」「光ファイバー通信」「短パン姿」などの、高次結合の混種語成分の造語問題は、また別の機会で論述するので、今回は省いておく。

これらを除いて残った用例数は、異なり語数で 1204 語あり、そのうち翻訳混種語は 328 語、和製混種語は 876 語である。また、延べ語数は 1331 語であるが、そのうち翻訳混種語は 335 語、和製混種語は 996 語あった。

なお、個々の複合語が臨時一語かどうかに関する認定は本稿の主旨ではないため、問題外とする。また、今回は主に二次、三次結合の混種語を調査対象とするが、場合によって四次以上結合の混種語も参考例として入れることにした。それから、本稿の段階では語基と接辞を区別する必要がないので、ここでは特に区別しないことも断っておく。

以上のような用例収集の原則に基づき、採集した混種語について

臺灣大學學術期刊資料庫

まず翻訳語か和製語かを分類する。ところが、現にある外来語が和製であるかどうかは簡単に認定できる問題ではない。そこで、便宜のため、本稿では『ジャンル別編集　最新カタカナ用語「読む見る」事典』と『基本外来語辞典』に基づき、判断することにする[4]。

二分類した混種語の用例について、語構成という観点からその構成要素に関する考察を行う。まず、個々の混種語の構成要素について、その結合形態(単純語基か複合語基か)と結合位置を調べ、その後､和･漢成分の混種語における造語様相､造語力を明らかにしたい。それを通して、和語成分と漢語成分が翻訳混種語と和製混種語においてそれぞれいかなる語構成的異同を示しているか、またどのような造語役割を果たしているのかを究明したい。

次、前述した方法で、集めた語例を、まず翻訳語か和製語かで分類する。それから、この二種類の混種語について、その和語･漢語成分がそれぞれ複合語のどの位置にあるかによって分類して示すと、次の表１のようになる。

表１　翻訳混種語と和製混種語における和語・漢語成分の位置別語数と比率

		翻訳混種語		和製混種語	
		前項	後項	前項	後項
異なり語数	和語成分	6(1.8%)	7(2.1%)	77(8.8%)	78(8.9%)
	漢語成分	31(9.5%)	284(86.6%)	312(35.6%)	409(46.7%)
延べ語数	和語成分	6(1.8%)	7(2.1%)	99(9.9%)	104(10.4%)
	漢語成分	33(9.9%)	289(86.3%)	351(35.2%)	442(44.4%)

注　（）内の％数はそれぞれ翻訳語全体、和製語全体の異なり語数、延べ語数に対する比率

以下、この表１を参照しながら、翻訳混種語と和製混種語における和語･漢語成分のそれぞれの造語機能を検討してみたい。

[4] この二冊の外来語辞典に見出し語の後に「和製語」「和製」と記してあるものを言うまでもなく和製語と認定し､何も記していないものは翻訳語と判断する。なお、辞典に載っていない場合は、英和辞典などを参照して判断する。

臺灣大學學術典藏庫

三、翻訳混種語の場合

この節では翻訳混種語とされる語例について構成要素の語種別に語構成の検討を試みる。

(一)翻訳混種語における和語成分について

筆者は拙稿(2001)において和語成分は漢語成分に比べ、外来語成分を含む混種語を構成する力、即ち造語力がかなり弱いと指摘したことがあるが[5]、そのことを今回の調査でも再び確認することができた。表 1 からわかるように、和語が外来語と結合して翻訳混種語を作り上げた例は、かなり少なく、前項に位置するものと後項に位置するものを併せても僅か 13 例しかない。つまり、翻訳混種語において和語成分は殆ど造語力を持たないと言える。以下用例を挙げる。

「光ディスク」	「バルサミコ酢」
「光デバイス」	「クロス商い」
「光ファイバー」	「ハンマー投げ」
「売りオペレーション」	「インサイダー取引」
「買いオペレーション」	「インデックス取引」
「先物スプレッド」	「オプション取引」
	「スワップ取引」

形態上、和語成分が前項に位置するか、または後項に位置するかという面ではあまり変わらない。但し、和語成分が単純語基かもしくは複合語基[6]かという点では、単純語基(光、売り、酢、投げなど)による造語数(8 例)が複合語基(「先物～」「～取引」)による造語数(5 例)よりやや多いことが見てとれる。

一方、これらの和語成分の意味分野を見てみると、「売り～」「～商い」などのような売買関係用語が 13 例のうち 8 例あるのが特徴的で

---

5 林(2001)346 頁を参照。

6 一個のみの語基で造語に参加する場合を単純語基と言い、他の一単位の語基と結合してから、再び造語機能を発揮するものを複合語基と言う。野村(1984)49 頁を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

ある。

(二)翻訳混種語における漢語成分について

表1からわかるように、漢語成分が外来語成分と結合し翻訳混種語を構成する場合、後項に位置するパターンが、284例と圧倒的に多いことがわかる。即ち、翻訳混種語において、漢語成分は後項要素として前項の外来語成分と結合する場合、造語力を大きく発揮していると言うことができる。

更に、漢語成分が外来語成分と結合している翻訳混種語を、その結合位置別及び構成パターン別により詳しく調べてみると、その結果は表2のようになる。

表2[7]　翻訳混種語における漢語・外来語成分の結合パターン別語数と比率

漢語成分が前項に			漢語成分が後項に		
	異なり数	延べ数		異なり数	延べ数
漢＋外	2(0.6%)	2(0.6%)	外＋漢	85(27%)	86(26.6%)
漢漢+外	22(7.0%)	24(7.4%)	外＋漢漢	163(51.7%)	168(52.0%)
漢漢+外外	4(1.3%)	4(1.2%)	外外+漢漢	17(5.4%)	17(5.3%)
漢漢漢+外	3(1%)	3(0.9%)	外+漢漢漢	19(6.0%)	19(5.9%)

注　()内の%数は、漢語成分と外来語成分が結合した翻訳混種語全体の異なり語数、延べ語数に対する比率

表2に示してあるように、漢語成分が外来語成分と複合して翻訳混種語を作り上げたパターンの中で最も多いのは二単位の漢語複合語基が後項に位置する[外+漢漢]という組み合わせで、翻訳語全体の約半分を占めている。特に結合度数が高い例をいくつか挙げると、

7　表の「漢」「外」とはそれぞれ漢語成分、外来語成分の一単位の単純語基であり、「漢漢」「外外」とは二単位の複合語基、「漢漢漢」は三単位の複合語基である。ここで言う単位とは、野村(1982)44頁に述べられている「最小単位」のことであり、「現代語ではそれ以上に分割することができない言語単位」である。本稿以下同様。第四章の「和」とは一単位の和語語基、「和和」とは二単位の和語語基のことである。野村氏は、最小単位がある条件のもとで一回結合したものを「β単位」とするが、本稿では最小単位の概念だけを採択して、「β単位」を考慮しないことを断っておく。

次のようなものが見られる。

「～言語」:「コンピューター言語」「ナチュラル言語」「プログラム言語」「マシン言語」…

「～現象」:「エージング現象」「オクロ現象」「ドミノ現象」「バブル現象」…

「～効果」:「ブーメラン効果」「シナジー効果」「カクテル効果」「アナウンスメント効果」…

「～爆弾」:「スマート爆弾」「プラスチック爆弾」「リチウム爆弾」「クラスター爆弾」…

「～方式」:「シーリング方式」「ホフマン方式」「バルクライン方式」「ワンススルー方式」…

一方、その逆の組み合わせ、即ち、二単位の漢語複合語基が前項に来て、一単位の外来語語基と組み合わさった[漢漢+外]パターン、例えば「巡航ミサイル」「電子マネー」「液晶テレビ」「磁気テープ」のようなものはあまり生産性がなく、22 例だけ見られる。つまり、翻訳混種語において、二単位の漢語複合語基は前項に位置するよりも後項に位置する方がはるかに造語力を発揮していると言える。これについては、日本語における修飾限定関係から説明することができる。要するに、一単位の外来語語基と二単位の漢語複合語基が混種語に結びつく場合、外来語語基が、厳密な意味を備えている安定した語形の漢語複合語基の前に来て、その漢語複合語基を更に修飾限定しやすいということであろう。

ところで、次は一単位の漢語単純語基と外来語成分との組み合わせを見てみよう。この場合、やはり漢語成分が後項に位置する[外+漢]のパターンの方が多くなっている。しかも、一単位の漢語単純語基が前項に位置する[漢＋外]パターンは生産力を殆ど持たないことに対して、後項に位置する[外+漢]のパターンは翻訳語全体の 1/4 強の造語率を占めているのである。これは、上に見た[漢漢+外]パターンよりも多く、[外+漢漢]パターンに次いで生産性を有する二番目の構成パターンであることに注意されたい。特に結合度数が高い例

臺灣大學學術期刊資料庫

をいくつか挙げると、次のようなものがある。

「～酸」:「アミノ酸」「サリチル酸」「リノール酸」…
「～制」:「ドラフト制」「クオータ制」「フロート制」…
「～症」:「チック症」「トキソプラズマ症」…
「～病」:「アルツハイマー病」「ケーソン病」…
「～法」:「ラベリング法」「デルファイ法」…

この[外+漢]パターンの漢語成分はいずれも結合専用の単純語基であり、外来語成分の後ろに付いて類概念を表すものであることが特徴的である。言わば、このような類概念を表す結合専用の漢語単純語基が翻訳混種語において前項に位置する漢語複合語基よりも活発な造語機能を発揮していると言える。これは、意味がややわかりにくい外国語を取り入れて翻訳する際に、このような類概念を表す結合専用の単純語基を外来語成分の後につけると、その外来語の意味を理解することにかなり有効的だろうと考えられよう。

表2に、他に二単位の漢語複合語基と二単位の外来語複合語基との組み合わせ([漢漢＋外外]・[外外＋漢漢])、また三単位の漢語複合語基と一単位の外来語単純語基との組み合わせ(「漢漢漢＋外」・「外＋漢漢漢」)も書いてあるが、これらも、漢語成分が後項に位置するものはまだ少し見受けられるが、漢語成分が前項に立つ場合は殆どないと言える。ここでは、漢語複合語基が後項に位置するパターンの具体例をいくつか挙げることにとどめておく。

＊[外外＋漢漢]パターン

「グラウンドカバー植物」「シリコン・カーバイド繊維」「フォローアップ調査」「マネーフロー分析」「マーケットバスケット方式」「オゾンホール現象」「アドオン金利」…

＊「外＋漢漢漢」パターン

「マクロ経済学」「レーザー内視鏡」「ダウン症候群」「アルカリ乾電池」「クラッシュ症候群」「リトマス試験紙」「アンチセンス治療法」…

ここで以上述べた論点に関する先行研究を検討し、比較してみよ

臺灣大學學術期刊資料庫

う。

森岡(1987)では、上記のような結合専用の漢語単純語基のことを「準接辞」と言い、この「準接辞」による外来語成分との派生語が多く見られる、とすでに指摘し、その後、「二字漢語との結合、つまり合成語になると、もっと盛んで、…」[8]ということが述べられている。本論の造語実態の考察を通してみた翻訳混種語においては、結合専用の漢語単純語基が後項に位置した場合、大いに造語機能を働かせていることは森岡（1987）の論じた通りである。しかし、二単位の漢語複合語基の造語性に関しては、本稿の翻訳混種語の考察では、前項に位置する二単位の漢語複合語基と外来語成分との組み合わせ（[漢漢+外]）は、後項に位置する結合専用の単純語基と外来語成分との組み合わせ([外+漢])ほど「盛ん」ではない、という造語実態から考えると、森岡(1987)の二字漢語と外来語との合成語が「もっと盛ん」という論述はあまり厳密ではないと言えるであろう。

なお、白井(1989)にも、漢語形態素について、

> 二字のものは混種語の前項にくることが多く、一字のものは混種語の後項にくることが多い。……。二字の漢語はそれ自体厳密な意味を備えているものが多いので、その前に更に修飾限定の形態素を加えて合成語を作り表現する必要が少ないのであろう。

ということが論じられている[9]。ところが、今回の調査結果は、二字漢語が混種語の前に来ることが多いという白井の主張とは反対であり、また、二字漢語の前に更に修飾限定の要素が来て合成語を作る必要がない、という白井の論点も不適切であることをものがたっていると言えよう。

四　和製混種語の場合

[8] 森岡(1987)160～161 頁を参照。
[9] 白井(1989)317 頁を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

この節では和製混種語とされる語例について構成要素の語種別に語構成的な検討を試みる。

（一）和製混種語における和語成分について

表1からわかるように、和語成分が外来語成分と結合した和製の混種語は和製混種語の全体ではあまり多くなく、2割り足らずである。結合位置別に見ると、和語成分が後項に位置する例が前項に位置する例よりやや多いが、それほど差はない。

更に、その和語成分が外来語成分と結合した和製混種語について、その結合位置別及び構成パターン別により詳しく見てみると、その結果は表3のようになる。

表3　和製混種語における和語・外来語成分の結合パターン別語数と比率

和語成分が前項に			和語成分が後項に		
	異なり数	延べ数		異なり数	延べ数
和＋外	46(29.7%)	67(33%)	外＋和	69(44.5%)	94(46.3%)
和和+外	30(19.4%)	31(15.3%)	外＋和和	6(3.9%)	7(3.4%)
和和和+外	1(0.6%)	1(0.5%)	外外+和	2(1.3%)	2(1.0%)
			外外+和和	1(0.6%)	1(0.5%)

注　（）内の％数は、和語成分と外来語成分が結合した和製混種語全体の異なり語数、延べ語数に対する比率

表3に示してあるとおり、和語単純語基と外来語語基との組み合わせが最も多く、[和+外]パターンと[外+和]パターンを併せて約7割り以上も占めている。これは、和語成分が外来語成分と和製混種語に結合する場合、和語複合語基よりも和語単純語基の方が造語力を有しているということである。

この、和語成分と外来語成分が結合した和製混種語で強い造語力を発揮している和語単純語基をその結合位置から見ると、前項に位置するものより後項に位置する混種語の方が多い。つまり、[和+外]パターンより[外+和]パターンの方が生産的であることがわかる。こ

臺灣大學學術期刊資料庫

の後項に位置する和語単純語基も類概念を表すものが多いようである。例えば、次のような例が見られる。

＊［外+和］パターン

「～色」:「コーヒー色」「クリーム色」「オレンジ色」…

「～型」:「ドーム型」「ポータブル型」「トカマク型」…

「～姿」:「スーツ姿」「パンツ姿」「ヘルメット姿」…

「～箱」:「マッチ箱」「リサイクル箱」

「～袋」:「ビニール袋」「ポリ袋」

「～頭」:「パーマ頭」「ポマード頭」

「～勤め」:「スナック勤め」「ソープ勤め」

「～張り」:「ガラス張り」「タイル張り」

それに対して、前項に位置するものには属性的な要素が多いように見受けられる。例えば、

＊［和+外］パターン

「紙～」:「紙コップ」「紙ナプキン」

「赤～」:「赤マント」「赤ワイン」

「黒ストッキング」「白ペンキ」「青テント」…

「内～」:「内ゲバ」「内ポケット」

「安～」:「安サラリーマン」「安ホテル」「安アパート」

「蒸し～」:「蒸しケーキ」「蒸しパン」

「生ビール」「水タンク」「右フック」…

などである。

一方、和製混種語における和語複合語基は、前項に立った場合が後項に立った時に比べ、約 5 倍の語例数を見せている。和製混種語における和語複合語基は単純語基とは逆に、前項に立った場合に、その造語力をより発揮していることがうかがえる。以下、それぞれの具体例を挙げると、次のようなものが見られる。

＊［和和+外］パターン

「大型～」:「大型ヘリ」「大型トラック」「大型ランタン」…

「大手～」:「大手スーパー」「大手メーカー」

臺灣大學學術期刊資料庫

「相手～」:「相手チーム」「相手ピッチャー」
「厚底ブーツ」「小型トラック」「長袖シャツ」「使い捨てカメラ」「吹き抜けスペース」…

＊［外+和和］パターン
「チーズ売り場」「アパレル大手」「オフバランス取引」「トタン屋根」「インスタント味噌汁」「エコ仲間」

それから、和語成分の文法的性質からみると、名詞の和語成分が外来語成分と結び付いた混種語が最も多く、約7割りの比率を有している。その次に多いのは、いわゆる動詞連用形の和語成分(動詞+動詞の複合動詞連用形も名詞+動詞の複合語の連用形も含めて)が外来語成分と結合した混種語も1/4ぐらいを占めている。このことから、名詞の和語に次いで動詞連用形の和語成分が、外来語成分と結合した和製混種語においても活発な造語機能を発揮していると考えられよう。前に挙げた例の他に、次のようなものも見られる。

「貸し出しカード」「手差しコピー」「網入りガラス」「戦いモード」「消しゴム」「下りボタン」「笑いアドリブ」…
「ルール作り」「マイナー落ち」「アルバイト上がり」「シーン分け」「カット割り」「アパート暮らし」「アリバイ崩し」…

(二) 和製混種語における漢語成分について

表1に表してあるとおり、今度の調査で漢語成分と外来語成分とが結び付いて出来た和製混種語の例はかなりの数が見られる。つまり、和製混種語において、和語成分よりも漢語成分の方がその造語力をずっと豊かに発揮しているということである。

ここで、これらの漢語成分が外来語成分と結合した和製混種語を、その結合位置別及び構成パターン別により詳しく見てみると、その結果は表4のようになる。

臺灣大學學術期刊資料庫

表 4　和製混種語における漢語・外来語成分の結合パターン別語数と比率

漢語成分が前項に			漢語成分が後項に		
	異なり数	延べ数		異なり数	延べ数
漢＋外	51(7.1%)	70(8.8%)	外＋漢	120(16.6%)	145(18.2%)
漢＋外外	1(0.1%)	1(0.1%)	外外+漢	8(1.1%)	8(1.0%)
漢漢+外	203(28.1%)	222(27.9%)	外＋漢漢	210(29.0%)	218(27.4%)
漢漢+外外	7(1%)	7(0.9%)	外外+漢漢	32(4.4%)	32(4.0%)
漢漢漢+外	23(3.2%)	24(3.0%)	外＋漢漢漢	26(3.6%)	26(3.3%)
漢漢漢＋外外	3(0.4%)	3(0.4%)	外外＋漢漢漢	4(0.6%)	4(0.5%)
漢漢漢漢+外	24(3.3%)	24(3.0%)	外＋漢漢漢漢	10(1.4%)	10(1.3%)
			外＋漢漢漢漢漢	1(0.1%)	1(0.1%)

注　（）内の％数は、漢語成分と外来語成分が結合した和製混種語全体の異なり語数、延べ語数に対する比率

表 4 に示されている如く、漢語成分と外来語成分が複合した和製混種語においては、二単位の漢語複合語基と一単位の外来語単純語基との二つの結合パターン([漢漢＋外]と[外＋漢漢])が最も多く、併せると全体の 5 割り以上を占めている。数字からみると、この二単位の漢語複合語基と一単位の外来語単純語基との結合において、漢語成分が前項に位置するものと後項に位置するものとはあまり差がなく、大体同じぐらいである。この点は、前節の翻訳混種語の、[外＋漢漢]の方が[漢漢＋外]よりはるかに多い、という状況と異なっていることが特記に値しよう。即ち、現に翻訳混種語がこの和製混種語とは相違たる実態になっていることから考えると、やはり外来語成分を含む混種語の語構成を論じるに当たっては、翻訳混種語と和製混種語を区別しておくべきであろう。

以下、いくつか結合度が高い例を挙げておく。

「環境～」:「環境スワップ」「環境ホルモン」…

臺灣大學學術期刊資料庫

「高級～」:「高級タクシー」「高級ブティック」…

「電子～」:「電子メディア」「電子ライター」…

「和風～」:「和風ピラフ」「和風ペンション」…

「高層～」:「高層ビル」「高層ホテル」「高層マンション」

「～会社」:「グループ会社」「トンネル会社」…

「～構想」:「エリゾンオフィス構想」「アルカディア構想」…

「～産業」:「シルバー産業」「ハイテク産業」…

「～方式」:「プラズマ方式」「トロイカ方式」…

「～療法」:「ショック療法」「ミサイル療法」…

上記の[漢漢＋外]と[外＋漢漢]パターンに次いで多いのは、一単位の漢語成分と一単位の外来語成分との組み合わせである。漢語成分が後項に位置する[外＋漢]パターンは前項に位置する[漢＋外]パターンより多く、約2倍以上になっている。言わば、和製混種語においても、一単位の漢語成分が一単位の外来語成分と結合する場合、その漢語成分が後項に位置しやすいということであろう。これは翻訳混種語と大体同じことであるが、但し、翻訳混種語の造語においては、一単位の漢語成分が後項に来る[外＋漢]パターンが、二単位の漢語成分が前項に来る[漢漢＋外]パターンよりもっと生産的である[10]。以下、いくつか生産性がある、[外＋漢]と[漢＋外]パターンの和製混種語を挙げておく。

「急～」:「急カーブ」「急ピッチ」「急ブレーキ」

「駅～」:「駅ビル」「駅ホーム」

「鉄～」:「鉄ケース」「鉄パイプ」

「新～」:「新オフィス」「新ギャラリー」…

「大～」:「大スター」「大ブレーク」…

「～機」:「ゲーム機」「プロペラ機」「プレス機」…

「～車」:「グリーン車」「マスコミ車」「レッカー車」…

「～場」:「スキー場」「パーキング場」「レッスン場」…

10　本稿の三の(二)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

「～代」:「ガソリン代」「バイト代」「コーヒー代」…

「～店」:「コンビに店」「チェーン店」「レンタカー店」…

上の例を見ると、前項に位置する一単位の漢語単純語基は、属性的な要素や修飾的な要素が多いようである。一方、後項に位置するものはいずれも結合専用の単純語基ばかりであり、類概念を表す接尾辞的な要素のものが多いことが特徴的である。従来の日本語の複合語研究において、この接尾辞的な漢語単純語基が大変高い造語力を有していると指摘されている[11]が、それのみならず、この外来語成分を含む混種語の考察からも、この接尾辞的な漢語単純語基は従来の和語･漢語成分との結合の造語域を出て､外来語成分とも複合して活発な造語機能を果たしていると言えよう。

上述した､高い生産性を持つ[漢漢＋外][外＋漢漢][漢＋外]][外＋漢]のパターン以外は､それぞれいずれも全体の 5%もない造語率を示している､あまり生産性のない組み合わせばかりである。ここでは、いくつかの例を挙げるだけにとどめておく。

まず、三単位の漢語複合語基と一単位の外来語語基との組み合わせについて、三単位の漢語複合語基が前項に位置するのも後項に位置するのも大体同じぐらいの造語率を示している。例えば、次のような例である。

＊[漢漢漢＋外]パターン

「外資系メーカー」「洗濯用ネット」「無差別テロ」「半導体チップ」「海賊版ビデオ」「超純水タンク」…

＊[外＋漢漢漢]パターン

「ストック経済化」「ジャンプ競技場」「ワンコイン駐車場」「エコ先進地」「ソフト著作権」「アルバイト情報誌」…

ほかに、[漢漢＋外外]と[外外＋漢漢]、そして[漢漢漢漢＋外]と[外＋漢漢漢漢]のパターンがあるが、表 4 に示してあるとおり、こ

11 白井(1989)317 頁に「一般に漢語の造語力を考えるとき、それは漢字一字一字が造語力が大きいということを意味しているように思う。」という記述が見られる。他に、野村(1978)なども参照されたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

の二種類の組み合わせは逆な造語実態を呈している。二単位の漢語複合語基が前項に位置する[漢漢＋外外]より 後項に位置する[外外＋漢漢]の方が生産的であるのに対して、四単位の漢語複合語基の場合は、それが前項に立つ[漢漢漢漢＋外]の方が[外＋漢漢漢漢]より少し造語率が高い。例を挙げると、次のとおりである。[12]

＊[漢漢＋外外]パターン

「百円ビジネスモデル」「電脳ハイパーシステム」…

＊[外外＋漢漢]パターン

「ハイテク摩擦」「アドオン電話」「パソコン販売」…

＊[漢漢漢漢＋外]パターン

「金融情報サービス」「化学兵器サリン」…

＊[外＋漢漢漢漢]パターン

「ハイテク電子機品」「サービス価格指数」…

五、ここまでのまとめ

以上、翻訳混種語と和製混種語について、それぞれにおける構成要素としての和語成分と漢語成分の造語実態、形態、造語性から分析してきた。本節では、上の考察を踏まえて、翻訳レベルの翻訳混種語と造語レベルの和製混種語において漢語成分と和語成分がいかなる語構成的な異同を示しているのかをまとめなおして論じてみたい。

外来語成分を含む混種語における漢語成分については、構成要素の造語性の面から考えると、漢語成分が翻訳語と和製語において大体類似した造語性、造語様相を示していると言える。まず、和語成分より漢語成分の方が両者の混種語においてともに大変な造語力を発揮していることが挙げられる。特に翻訳混種語の場合、漢語成分

12　表４には、上述した、漢語と外来語成分が複合した和製混種語の種種のパターン以外に、[漢漢漢＋外外][外外＋漢漢漢][外＋漢漢漢漢漢]という三つの構成パターンも見られるが、いずれも全体の1%もない造語率を示しているので、省いておいた。

臺灣大學學術期刊資料庫

と外来語成分との組み合わせは全体の 95%以上という高い造語率を示しており、和製混種語も約 80%以上の造語率をもっている。

そして、形態の面から言うと、両者の混種語ともに漢語単純語基より漢語複合語基が外来語語基との複合において生産的である。

結合位置に関しては、漢語単純語基は両者の混種語ともに後項に位置しやすいと言える。和製混種語では漢語単純語基が後項としての例が前項としての例の 2 倍以上であり、翻訳混種語の場合になると、この傾向が更に強くなって、漢語単純語基と外来語語基との造語は殆ど漢語語基が後項に位置する[外＋漢]パターンばかりである。しかも、これは[漢漢＋外]パターンよりも高い生産性を有している。それは、一般的に外来語の意味を理解するために、意味がやや抽象的でわかりにくい外来語成分の後に類概念を表す漢語をつける傾向があるからである。これは、外国語を取り入れる際に、その外国語を音訳した上で、漢語成分の視覚効果を借り、意味理解をはかろうとするためであろう。この類概念を表す後項漢語単純語基の、意味理解上の視覚効果から考えると、これから、この[外＋漢]パターンの翻訳・和製混種語がどんどん作り上げられていくだろうと考えられよう。

一方、漢語複合語基は、翻訳混種語と和製混種語において異なる造語実態を呈している。和製混種語では漢語複合語基が前項に位置する例と後項に位置する例とでそれほど差がないが、翻訳混種語では前項に位置する例より後項に位置する例の方が多い。言わば、漢語複合語基は外来語語基と結合するに当たって、和製混種語の場合は前項にも後項にも位置するのに対して、翻訳混種語においては後項に位置しやすいということである。

次に、和語成分の両混種語の語構成における相違を述べよう。

和語成分は、和製混種語においては、漢語成分ほどではないものの、まだ少し造語力(和製混種語全体の 2 割り足らず)をもっているが、翻訳混種語においては殆ど造語力がないと言える。これは、外国語を日本語に翻訳するに当たって、あまり和語成分には訳せない

臺灣大學學術期刊資料庫

ということであろう。

和製混種語における和語成分の語構成的なことに関して次のような傾向が見られる。

形態から見ると、和語成分は漢語成分と違って、複合語基より単純語基のほうが外来語成分と相性がよく、生産的である。即ち、[漢＋外][外＋漢]のようなパターンより[漢漢＋外][外＋漢漢]パターンの方が多いのに対して、[和和＋外][外＋和和]パターンより[和＋外][外＋和] パターンの方が多いのである。野村(1984)には、[漢漢＋外][外＋漢漢]のようなタイプは出現数が多いのに対して、[漢＋外][外＋漢]のようなタイプは出現しにくい、という現象について、

> これは、外来語の一単位の語基が漢語の二単位語基に相当することを意味している。

と述べられ[13]、森岡(1987)にも、

> 外来語の語基は造語要素として漢語語基(特に二字漢語)に等しい機能をもっていると見られる。

と論じられている[14]。そうすると、本稿の考察から考えれば、[和＋外][外＋和] パターンの方が[和和＋外][外＋和和]パターンより生産的であることは、一単位の外来語語基の造語機能が一単位の和語語基の造語機能に相当すると言えるのであろう。

なお、結合位置から言えば、和語単純語基も漢語単純語基と同じように、後項に位置するもののほうが多い。この、後項に位置する和語単純語基も類概念を表すものが多いようである。一方、和語複合語基は漢語複合語基とは違って、後項に位置するものより前項に位置するものの方が多い。

それから、外来語成分を含む混種語の後項に類概念を表す要素が来やすいことに関して、本稿の考察からの結論を述べたい。

従来、類概念を表す基本的な要素が複合語の後項に位置しやすい、

13 野村(1984)46頁を参照。
14 森岡(1987)161頁を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

と指摘されている[15]が、本稿の考察からも、外来語成分の後に類概念を表す和語・漢語成分が結び付きやすいということが検証できた。特に翻訳混種語の場合においてその傾向が更に強いことも明らかになった。本稿の調査では、翻訳混種語においてややわかりにくい外来語成分の借用語の後に、実質的な基本概念を表す漢語成分を訳語としてつけるパターンが約(翻訳混種語)全体の 8 割強であった[16]。

一方、和製混種語の場合になると、類概念を表す和・漢の単純語基がやはり後項に位置するパターンが多く、翻訳混種語とあまり変わらない。しかし、和・漢の複合語基は単純語基とは違って、和語のほうは前項に位置するものが多数見られるのに対して、漢語は前項に位置する数と後項に位置する数とであまり差がない。それは、今度逆に和・漢の複合語基と結合して和製混種語を作る外来語成分のほうが、基本の類概念を表す、馴染みの深いものが少なくないからである。例えば、

「～マンション」:「豪華マンション」「新築マンション」…

「～メーカー」:「部品メーカー」「電機メーカー」…

「～バス」:「高速バス」「通勤バス」「市バス」…

「～ビデオ」:「宣伝ビデオ」「防犯ビデオ」…

「～スペース」:「収納スペース」「駐車スペース」…

つまり、翻訳レベルの段階では類概念を表す漢語単純語基も漢語複合語基とともに翻訳混種語の造語で大きな役割を果たしているのである。一方、造語レベルの段階では、和製混種語に作り上げられる際に、その類概念を表す役割は、漢語成分のみならず、古くからの和語成分、また馴染みの深い基本概念を表す外来語成分によって

---

15 野村(1998)161 頁に

> 結合専用語基は前要素として出現しやすく、後要素にあらわれるものはすくない．これは、後要素には類概念を表す基本的な複合語基が位置しやすいためとかんがえられる．

と述べられている。他に、『外来語と英語の谷間』88 頁にも、「ディーゼルカー diesel」「ガードマン guard」「キャッチボール catch」などの例を挙げ、本来の外国語の後につく語は類概念を表す特徴をもっている、というような記述が見られる。

16 前出の表 1 を参照。

臺灣博碩士論文知識加值系統 期刊資料庫

担われることもあるということである。

最後に、この類概念を表す要素が翻訳混種語においてどのように付けられるのかについて、少し説明を付け加えたい。

いちばん直接的な方法としては、類概念を表す外国語の要素をそのまま訳すことである。

例えば、

「カーボン紙　carbon paper」「アミノ酸　amino acid」「リューマチ熱　rheumatic fever」「ドラフト制　draft system」「バブル現象　bubble phenomenon」「カクテル効果　cocktail effect」「リゾート開発　resort development」…

次に、外国語を外来語成分に音訳した後、更に類概念を表す従来の日本語の要素をプラスする例である。

「ハトロン紙　patroon(オランダ語)」「シングル盤　single」「トラック競技　track」「バロック音楽　baroque」「ダウンサイジング現象　downsizing」「ニコチン中毒　nicotinism」「カロテノイド色素　carotenoid」…

などのように、外国語を取り入れるに当たって、やや抽象的な概念を表す外国語の意味を明確にさせる趣があるように見受けられる。

他に、もう一つのパターンが見られる。それはいわゆる重複表現のものであり、

「アンケート調査　enquête(仏)」「サハラ砂漠　the Sahara」「スモン病」…

などのように[17]、後項の漢語成分が即ち前項の外来語成分のその訳語であり、その漢語に託されている意味の助けによって前項の外国語の表す意味概念をはっきりさせている、言わば、その外国語の音訳語と意訳語との合成語である。

六、おわりに

17　石野(1983)147頁による。

臺灣大學學術期刊資料庫

形態上、同じように和語・漢語成分と外来語成分が結び付いた混種語であるが、その混種語の性質の違いによって、構成要素の和・漢成分が異なる語構成的な振る舞いを見せることがある。本稿では、まず外来語成分を含む混種語を、翻訳レベルの翻訳混種語と造語レベルの和製混種語に分け、それぞれにおける和語成分と漢語成分の語構成的異同を明らかにした。

翻訳混種語では和語成分があまり造語力を持たないのに対して、和製混種語では、和語成分がそれなりの造語力を持っている。言わば、和語成分の造語役割はまだ外国語寄りの翻訳レベルでは殆ど果たされないが、日本語化の造語レベルでは漢語成分とともに幾分か果たされている。つまり、和語成分は外国語的な外来語成分と結び付き、外来語をより日本語化する構成要素だと言えよう。

一方、翻訳レベルの翻訳混種語を、借用レベルの外来語成分同士の翻訳外来語複合語と造語レベルの和製混種語との中間的レベルのものだと考えるとしたら、前述した、翻訳混種語においては和語成分の造語機能が殆ど働いていない点をも考え合わせると、漢語成分は、借用レベルから造語レベルへの橋渡しの役割を大いに果たしていると言えよう。要するに、外来語の複合語において、漢語成分は外国語的な外来語成分と固有の和語成分の中間的な造語性をもつ要素と見ることができる。

本稿では、外来語成分を含む混種語について、その構成要素における語構成的な分析を和語成分及び漢語成分だけを対象にして取り上げたが、本来もう一方の外来語成分に関する語構成的な分析も併せて比較、検討すべきであることは言うまでもない。今回は紙幅の制限により、それが出来なかったが、本稿の続編としてまた別の機会にゆずりたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告 61 電子計算機による国語研究Ⅸ』国立国語研究所　p. 102-138

―――（1982）「新語辞典の外来語」『言語生活』366 号　筑摩書房　p. 42－49

―――（1984）「語種と造語力」『日本語学』3－9　明治書院　p. 40-54

森岡健二（1987）「外来語の派生語彙」『現代語研究シリーズ　第一巻　語彙の形成　第 6 章』明治書院　p. 149-167

白井清子（1989）「現代の混種語―その語構成と形態素―」『大野晋先生古稀記念論文集　日本研究 1　言語と伝承』角川書店　p. 312-324

―――（1991a）「混種語に現れる和漢の形態素」『国語国文論集』20 号　学習院女子短期大学国語国文学会　p. 18-29

―――（1991b）「混種語の語構成」『学習院女子短期大学紀要』29 号　p. 123-138

原野亮子（1992）「外来語及び外来語成分を含む混種語指導上の問題点―その 1―」『北九州大学文学部紀要』46 号　p. 107-124

野村雅昭（1998）「結合専用形態の複合字音語基」『早稲田大学　日本語研究教育センター紀要』11 号　p. 149-162

林　慧君（2001）「外来語成分を含む混種語について―その造語実態と構成要素を中心に―」『筑紫語学論叢　奥村三雄博士追悼記念論文集』風間書房　p. 341-357

石野博史（1983）『現代外来語考』大修館書店

石綿敏雄（1983）『外来語と英語の谷間』秋山書店

―――（1990）『基本外来語辞典』東京堂出版

語例調査資料

『ジャンル別編集　最新カタカナ用語「読む見る」事典』　講談社編　1998 年　講談社

臺灣大學學術期刊資料庫

『AERA』 2001 年 4 月―2002 年 2 月(第 14 巻 17 号通巻 695 号―第 15 巻 8 号通巻 742 号の偶数月分)
『’01 年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編 2002 年 映人社
『冬のオペラ』北村 薫著 2002 年 角川書店
『レクイエム』篠田節子著 2002 年 文藝春秋
『とんがらしの誘惑』椎名 誠著 2002 年 文藝春秋

臺灣大學學術期刊資料庫